

CNAC 第 13 回全国フォーラム

「海の多様性を知る～SDGs 目標 14 を考えよう～」

日時：平成 31 年 1 月 26 日(土) 13:30～17:30

場所：品川第一区民集会所 第 1 集会室（東京都品川区北品川 3 丁目 11 番地 16 号）

主催：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会

後援：国土交通省港湾局 一般財団法人みなと総合研究財団

■開会の挨拶

スピーカー：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好 利和

CNAC の全国フォーラムも今年 13 回目。設立から 10 年以上が過ぎた。この 10 年間で CNAC としても海辺の体験活動の普及という大きなテーマの中でいろいろ活動してきた。多くの方々の協力をいただきここまで来たが、皆様のご期待に実際沿えているか、ということに関しては、まだまだ大きな声ではお答えができないような状況。

第 13 回目を迎えた本日は「海の多様性を知る」というテーマの中で、国連が提唱している SDGs というキーワードで行う。

ご存じの方もいるかと思うが、SDGs というのは私たち体験活動をしている者としては 2005 年から始まった ESD、持続可能な社会のための開発のための教育で ESD という言葉を聞く中で、その言葉に対して我々が何か実践できたのかというのが、疑問だった。

その後、2016 年からこの SDGs が国連で提唱され、そして、昨年度あたりからいろいろな場面で SDGs という言葉を聞くようになった。新聞でも 1 面に朝日新聞が取り上げたりした。

SDGs というのは、ESD の時よりより具体的な 17 の目標を設定していて、それをこの 17 色の輪になっていて、1 つ 1 つにさらに具体的な目標があり、全部で 160 を超えます。

いろいろな意味で我々のような体験活動、環境にかかわる者だけではなくて、最近は企業も非常にこういった国連の動きとともに、世界的な運動として、この SDGs という具体的なゴールを、2030 年はまだまだ先のことだが目指して、世界的な運動をしようと今動いている。

CNAC としても、その中の 14 番目である“海の豊かさを守ろう”という、非常にわかりやすい目標があり、それを今日は取り上げてみた。

詳しいことはまた後ほど、石井先生にお話を聞きたいと思うが、こういった形で CNAC という団体が、SDGs の目標の 1 つとして、実践できる場になればいいと代表としても考えている。

ここ 3 年ほど小笠原へ行く仕事があり、小笠原のエコツアーガイドの方々のリスクマネジメントの研修の手伝いをさせていただいた。海に囲まれた日本という国の広さと、また、豊かさまたいなものを感じながら、小笠原の島に行かせていただいた。

ここに参加される方が、新しい出会い、新しい発見をしていただいて、そして最後には1人1人が自分の目標をぜひ持って帰っていただきたい。テーマがSDGsなので、1人1人が何らかの目標を持って帰っていただくと、このフォーラムの成果になるのではないかなと思っている。

後半は分科会になりますので、皆さんもぜひご意見を出していただいて、いろいろな立場の方がいろいろな意見を交わす機会になればと思っている。

■来賓挨拶 1

スピーカー：国土交通省 港湾局 海洋・環境課長 中崎 剛様

私ども海洋・環境課の仕事、あるいは港湾局の仕事に主に現場でご協力いただき、SDGsをまさに現場で推進をしていただいていることにこの場を借りまして、感謝を申し上げます。

今日のテーマはSDGsであり、まさにサステナブルでないと海の環境は世界的にも維持できないし、産業も地域振興も成り立たないというのを実感している。

サステナブルであるための条件を我々も日々考えているが、今日のテーマの中に出てくる、1つは観光で塩田室長からクルーズの話があるが、観光を初めとする産業がその各地域でサステナブルでないと、なかなか地球環境のことを言う余裕も出てこないということを実感しているので、産業と連携していくサステナブルの必要性が1つ。

それからもう1つ、今日の講演で教育関係の講演が幾つかあるが、教育が次のサステナブルのもう1つの柱ではないかと思っている。これは環境を教えるだけではなくて、小さいときから自然に携わっていると、その後、大人になったときに、環境のことが好きだ、とか、そういう次元ではなくて、まさに地球全体のサステナブルが考えられるような思考ができるようになるのではないかな。

日本の周りはみんな海だと皆言うが、実は地球全体がほとんど海だということも子どものころから触れていないとなかなか感じるができない。そこは今日、湘南学園木村さんのほうからも具体的なお話をいただけたと思うので、多分実感としてわかるのではないかなと思っている。

サステナブルな産業のつながりと、人の小さいときからサステナブルにするための人材育成が大事だということで、引き続き我々もそこを何とか支援していきたいと思っている。

実は当課では洋上風力発電ということもやっていて、そういうCO2を出さないようにする発電で、非常に重要だと思っていたが、先ほど昨年発表された、大塚さんと話をしていたときに、元々水産業と観光を結びつけて、1次産業と3次産業を結びつけるという話が今日を中心であったが、再生可能エネルギーまで取り込んで、まさに本当の6次産業化をやろうとされているという話も伺った。サステナブルの視点で産業教育を突き詰めていくと、大体みんな同じような活動をするようになってきているのだな、ということを実感したところ。引き続き、皆さんのネットワークを生かして活動を連携しながら強力に進めていきたいと思うので、協力をお願いします。

■来賓挨拶 2

スピーカー：(一財)みなと総合研究財団 専務理事 丸山 隆英様

本日は各地からいろいろな方々がお集まりになり、この第 13 回の全国フォーラムが開催されますこと、まずもってお喜びを申し上げたいと思います。

私どものみなと総研は途中で組織の衣替えがあったが、今年で 32 年目を迎え、設立当初からいろいろな海に関する活動に対する支援というのを微力ながら続けさせていただいている。この CNAC の活動にも大いに賛同し、ずっと下支えをさせていただいている。

今日は多様性がテーマだと伺っているが、自然体験活動だけではなく、海域環境であるとか、あるいは海洋の資源であるとか、そういった幅広い議論につながっていくと伺っており大変興味深く感じる。

先ほど三好代表からもあったように、日本には広大な海があるので、ぜひこの海を見て、俺のところが中心だ、と言う自治体が現れるぐらいに、海のことを意識していただくというのを私なりに目標にしたいと思う。

■事例紹介 一例目

プレゼンター：田中 真一 さん 認定 NPO 法人エバーラスティングネイチャー事務長

表題：ウミガメ保全への取り組み

はじめに

私たちが行っているウミガメ保全の取り組み、活動の紹介、それとウミガメと環境に関する話をする中で、「海の多様性を知る」という今回のテーマについて考えるヒントやきっかけになればと思う。

エバーラスティングネイチャーの紹介。種を絶滅させない、といったことを全体的なテーマとして掲げて活動している。

1999 年に任意団体として設立し、2002 年に NPO 法人に、2013 年に認定 NPO として認証されて現在に至る。

団体の目的は海洋生物や海洋環境の保全を目的に活動しており、今のところ、ウミガメの保全が主体となっている。

事業拠点として、横浜に事務所がある他、小笠原で小笠原海洋センターという拠点があり運営している。あと、私が常駐している千葉県館山市に出張所がある。

他にインドネシアにも事業所があり、こちらは現地の NGO として独立しているが、このような事業拠点の形態で活動を行っている。

スタッフは、日本人が 10 名程度、インドネシアの方は現地スタッフが本部に 3 名の他、活動拠点の小

さい島がたくさんあり、そちらに大体 20 名。収支予算の規模で年間 6,000 万円程度の団体。

1. ウミガメの保全、保護活動について

ウミガメの保全活動を主体に行っていると話したが、日本全国、ウミガメ保護とか保全にかかわっている団体というのはたくさんあり、60 団体~70 団体と言われている。世界で言うと、数百になる。

各団体さまざまな視点で活動を行っており、一般的なイメージとしてわかりやすいのは個体の保護、動物愛護的な視点での活動かと思う。一番多いのは、種や絶滅危惧種を保全するという視点で、ELNA もこの視点で活動を行っているが、今後は生物多様性保全の視点に移行しつつ、活動のターゲットングを行っている。ウミガメを守る、生物多様性や生態系を保護する、ということは、なかなかイメージが湧かないかと思う。そこで、ウミガメが生態系においてどういった役割、どういった立ち位置にあるのかということを少し説明したい。

2. ウミガメの餌について

こういったように海洋生態系の食物連鎖があり、例えば本州なんかでよく産卵しているアカウミガメが何を食べているかという、カニとかイカとか貝で、小笠原で多く産卵しているアオウミガメという亀は、主に海草を食べて、外洋ではクラゲを食べている。タイマイという種類の亀は、べっこうの材料になっていた亀で、カイメンという無脊椎動物（海綿動物）を食べている。オサガメ、これはウミガメの中で一番大型種で、クラゲを食べている。

ウミガメと一言で言っても、種類によって食べている餌がかなり変わり、海洋生態系のそれぞれの栄養段階にダイレクトにかかわっているという、非常に珍しい動物でないかと思う。

3. ウミガメの産卵について

あと、やはりウミガメというと皆さん産卵をイメージされると思うが、海と陸を行き来する動物はあまり多くないが、その中の 1 つということで、亀はこうやって産卵する。そうすると当然孵化して子亀が海に帰っていくが、やはり全てが孵化するとも限らないので、死亡してしまう卵がある。

そういったものは砂の中の生き物の餌になり、それが分解されて、ある有機物に分解される。そして、そういったものはこういった陸上の植物に吸収され、またそれが枯れると有機物に分解して、一部はまた植物に吸収されて、雨などが降ると海へ流れていく。

要するに、有機物や栄養塩の海と陸の循環にも一役を買っている。よく皆さん、森が海を育てるなんという言葉聞いたことがあると思うが、サケが遡上して、その産卵が終わったサケを熊が食べて、それが森に帰る。またそれが海に戻ってくる。そういったような役割をウミガメも担っている。

それとあと、ウミガメはこうして産卵のため上陸するが、砂浜に大きな穴を掘って産卵するので、砂地が荒れる。そうすると、その砂地に生息している生物、植物にとってはある種の攪乱になり、一時的に

破壊されることによって、破壊された場所に新しいまた生物層の流入が起きたりと、その砂地の生態系で考えるとある意味、いい攪乱、新陳代謝を促しているのではないかと、こういった役割もウミガメは担っていると我々は考えて活動している。

4. ELNA の各地での活動について

私たちの活動は先ほど話した通り日本とインドネシアで行い、細かく分けると関東、小笠原、インドネシアのジャワ海と西パプア州、この4つの拠点があり、それぞれの場所のウミガメの事情により、活動している内容や対象種が変わってくる。

各拠点に言えることは、それぞれ社会的なバックグラウンドや問題があり、関東だと沿岸漁業の混獲だったり、小笠原だと観光業やそういったものとの両立、それとインドネシアだとやはり卵をとって食べてしまっていると、それは貧困の問題とかも絡んでくるが、そういった社会的な問題もあり、そういうものをいかに解決していくか、を目的に活動している。

去年から ELNA で“KAMEST”と言うサイトも公開した。ウミガメの漂着があった地点を、位置情報だけが、ネット上で公開したもの。興味のある方はここにアクセスすれば見れる。

5. 小笠原で増えるウミガメ

これは去年1年間で確認したウミガメ死亡漂着のうち、我々が調査、情報を得た数で、**大体年間 100 頭ぐらい、主に千葉県と茨城県が主体になっているが**、そういった情報があり、調査をしている。

それと、これは別の拠点、小笠原拠点のほうの産卵の状況で、かなり古いときから小笠原の産卵数のデータがある。1978年、父島の産卵数が40 巣だったが、それが2016年2,600 巣体で、大体40年ぐらいで60倍ぐらいまで増えている。このグラフを見てもわかるとおり、増加傾向を示している。

海外のモデルの研究者にデータを提供して解析してもらったところ、**世界でアオウミガメが増えているところは5箇所しかなく、その中で小笠原の父島というのは2番目に多い増回率となっており、年率で6.8%**という結果が得られている。

このように小笠原では亀が増えているが、小笠原の特徴というのは亀を漁獲対象物として捕獲し、食用にしている。東京都の認可で捕獲上限数が設けられており、そのとおりにずっと続けているが、年間100頭ぐらいはとって食べている。

先ほどアオウミガメが増えている場所が5箇所あると言ったが、当然その中で亀をとって食べているところは小笠原だけであり、**持続可能な捕獲を継続しているウミガメ産卵として世界のウミガメ研究が注目している。**

ウミガメの個体数が増えて、産卵が増えて、うれしいが、小笠原は世界遺産になり当然観光客がかなり増加している。小笠原の場合、ちょっとした市街地の脇の海岸とかでも産卵があり、やはり皆さん、観光客の方が見たいので、そういったところで産卵を見る人がかなり増えてきて、亀にとって産卵を妨

害する一因にもなる。また、ウミガメが産卵した後、海に帰らないで道路に出てきてしまう問題も出ている。

子亀は明るいほうに向かう性質があるので、市街地に近い海岸で孵化した子亀は海に帰らずに、海とは反対の道路のほうに行ってしまう。そうすると、子亀の交通事故などが起きてしまうこともある。

全て人為的な部分が大きいが、ウミガメが増えたら増えたで人間との接触も多くなり、そういった問題も出てきている。

6. インドネシアのウミガメ問題

話は変わってインドネシアの話。インドネシアではウミガメの卵が食用のために採取されている。とっている人は食べることだけが目的ではなくて、現金収入のため販売も目的としている。インドネシアの国の法律ではウミガメ卵の採取は禁止されているが、インドネシアはすごく島が多く1万7,000島とか1万8,000島あり、いわゆる島嶼国家で、小さい島に法律なんて全然効果がないので、本当に何もしなければすべての卵がとられてしまう。それに対しても我々は活動をしている。

どういったことをやっているかという、それまでとっていた人、密漁者と呼んでしまうと呼び方が悪いかもしいが、とっている人たちも**生活のためにとっている**ので、彼らを雇用して仕事を与えて、**その分のお金を払い、仲間に引き込んで卵を守ろう**、という活動をしている。

このやり方はやはり賛否両論あり、根本的に解決になっていないだろうとか、お金がなくなったらどうするのかとか、そんなことをずっと言われ続けてきていたが、ウミガメ個体数のかなり急激な減少があったので、何とかしなければいけないということでやり始めた。でも、何とかやり続けて、長いところだともう20年ぐらいになっており、ウミガメ産卵数は増えてきた。本当に**卵を人々にとられないように守る**だけで、特に卵を移植したり、人工孵化場に持っていったりということは一切やらなくても、**ウミガメは増えていく**。これはタイマイという種類の亀。

7. ウミガメと海洋ゴミの問題

やはり亀と言うと、海洋ごみに対しての一般の方の興味が今すごい。私も20年近く活動をしているが、私を感じる中で本当に今一番の関心度ではないか。

死亡漂着するウミガメの調査をしているが、解剖するとやはりいろいろなごみが出てくる。風船、ペン、缶、スポンジ、釣り糸などが出てくる。実際にやはり食べている。

我々はごみの調査のために漂着するウミガメの調査をしているわけではないが、やはり自然と情報が得られるもので、調べてみたところ、2004年から2017年、累計で1,500頭、こちらがN数になるが、中にはやはり腐敗が激しくて全然どうなっているかわからないような個体もいたが、それを入れてもやはり半数ぐらいのウミガメは何らかのごみを食べている。**確認できた個体で見ると、大体7割弱ぐらいのウミガメから何かしらのごみが出てくる**という状況。

実際、こういった影響があるのかというと、これは事実ではなくて、そういったことが言われているということで、腸にごみが詰まって死んでしまうということ。

2番目はやはり本来、餌の部分がごみによって埋まっているのでその分の栄養障害が起きるのではないか。あとはごみがお腹の中にずっと滞留することによって、それが何か溶けたりして影響するのではないか。

あと4番、これも結構最近話題になっているが、マイクロプラスチック、こういった物を食べて、やはりその毒性が体内に取り込まれたりとか、逆にマイクロプラスチック自体がリンパ系とかに入り込んで生理的な影響があるのではないか。こういったことが言われている。

実際に誤食されたごみがどうなっているか、我々が確認している死亡個体においては大体排出されている。これはうみがめの尻尾を裏側から見たところで、これが肛門。アップで見るとこんな感じで、出てきたゴミというのはこんな感じ。

やはり7割弱ぐらいのウミガメがゴミを食べているが、実際に詰まって、腸とかが閉塞していたというのは1例も見えていない。ただ、我々が見ているウミガメはごく一部なので、これよりも小さいウミガメとかはこういった影響かわからない。少なくとも我々が調査した中では詰まっていたということはない。

我々の調査はウミガメのごみ誤食を目的でやっているわけではないが、やはり社会の関心が強くなってきているので、これまで調査で得られたゴミ誤食データを解析してみると、全く傾向など読み取れないと思っていたが、結構、きれいに年推移が確認できたりした。これが何を意味するのか現時点ではわからないが、統計的にも有意差が出ている年もある。海の中のごみの量を示す数字ではないが、都道府県の比較もどんな感じかとやってみた。死亡漂着したウミガメがどこを泳いで、どこで餌を食べたかということは一切考慮されていないので、あくまでも目安となるが、茨城県が多くて千葉県が少ない結果となった。

死亡漂着したウミガメがゴミを食べていたということで、海洋ゴミが死因に影響している、していないの議論になりがちだが、こういった調査によって海岸だけではなく、**海の中のごみの量なんかを知る目安というか指標にもなるのではないかな**と思って、最近我々は活動の方向転換をしている。

海洋ゴミに関しては、ウミガメが食べている問題だけではなく、ウミガメに絡まるという問題もある。捨てられた漁網にウミガメが引っかかるということもあるし、これは実際に小笠原のほうで確認された例だが、ウミガメがビールケースに挟まったまま出られなくなって海を漂流している状態で発見された。甲羅を見るとすごく藻が付着しているので、結構な時間、海に浮いていたのではないかと考えられる。

実はこの亀はこの状態で生きていて、ビールケースを割ってウミガメを取り出し、飼育したら元気になった。このウミガメは藻を落とされてきれいになり、海に元気に帰っていった。

去年、亀の鼻にストローが刺さった動画がかなり問題になったと思うが、そういった例は一部かもしれないが、実際にこういった例もある。

8. まとめ

皆さん、ウミガメをほとんど知らない人はいないと思うが、結構ウミガメというのはわかっていないことが多くて、例えば、何年生きるか、なんてよく質問されるが、寿命もよくわかっていない。すごく長く生きるとは言われているが、生態を解明する上で、1代を追うだけでも恐らく何十年もかかってしまう生き物で、かなり息の長い調査や活動が必要になってくるし、当然海に生きている生き物なので、その過程で、海的环境なんかもウミガメを調べることによっていろいろ情報が得られるということも最近わかってきた。今後もこういった活動を継続していきたいと思い、それに伴って情報も発信していきたいと思っている。

■事例紹介 二例目

プレゼンター：木村 陽一郎 さん 学校法人湘南学園小学校教諭

表題：児童向け海辺の環境学習の実践 湘南学園小学校の取り組みから

はじめに

現在、6年生の担任をしております。よろしくお願いいたします。

1. 湘南学園小学校の成り立ち

湘南学園小学校は、藤沢、鵜沼というところにあり、ここは別荘地として戦後開発されて、多くの有名人が住んでいた。東海道線が開通して通勤ができるようになったということで、定住される方が多くなってきた中で、定住される方が多くなってくると、求められてくるのが医療機関と教育機関で、地元の人たちのニーズがどんどん高まっていった。

折しも藤沢の東海道線の南側には小学校がなかったということで、藤沢町(当時)の町長などのいろいろ根回しなどもあり学校設立の条件が整った。

当時、会社の社員寮だったところを校舎にしたりして、1933年に創立した。

その後、広大な土地を寄附してくれた企業の社長さんも、自身が理事長になったりとかではなく、「どうか保護者の皆さんでいい学校をつくってください」という形で、まさに金は出すけれども口は出さぬ、という形で発展していったと聞いている。

以来、その精神を引き継ぎ、**湘南学園は保護者と教員がつくる**という精神で学校運営が進められている。最初にできたのが幼稚園・小学校で、数名の在籍だったが、徐々に園児、児童が集まり、その子供たちの受け皿、進学先ということで中学、高校と開校し、現在、幼稚園から高校までの男女共学の総合学園となっている。

2. 湘南学園小学校の運営

先ほど言ったように特定のオーナーはおらず、宗教法人でもなく、大学の付属でもないという確固たる財政基盤もない中、何とか奇跡的にやってきた。

理事会は保護者と教員の代表から成っている。必ず理事長が保護者ということで、高校3年でお子さんが卒業すると、理事長は変わらなければいけない。

ということで、本当に奇跡的に、戦争も超えてやってきた。私も30年以上いて、本当に危機的なときに問題に対処する上で、最適な理事長になっていただけた保護者がいらっしゃるということが続き、偶然のバトンタッチのような形で、ここまで来ている。

幸い近年教員と保護者の対立はなく、円満に進んでいる。

3. 湘南学園小学校の運営

環境の学習のことで言うと、1・2年生は生活科で特に強調してきていないが、3・4年生以降、テーマを決めて学習をすすめてきていて、そのテーマに環境学習に近いものが入り入れられている。

3年生は地域学習。社会科も地域の学習なので、そこから広がり、歩いて15分以内で海に行けるので、「海」をテーマにしている。1泊の宿泊学習の宿泊地は江の島になっている。

4年生はそこからさらに発展し地域をひろげて、「山の学校」と称し、山梨県の河口湖町に2泊3日。現在ちょうど実施しているが、新潟県の十日町市に「雪の学校」と称し、雪の体験をするということを中心に活動を展開している。

6年生は修学旅行ということで、宿泊地は京都・奈良、これはかなり環境学習とは学習の性質が離れるが、社会の歴史にとどまらないで、鎌倉彫にチャレンジするなど、総合的に展開している。

4. 湘南学園小学校と海の活動

海の活動は、CNACの小池さんにずっと協力していただいてやっている。きょうここにお招きいただいたのもそのきっかけで、先ほどの、学校が奇跡的に運営できているのと同じように、なぜこういうことができたのかなというのを今回発表させていただくことになった。

創立以来、海が近いので、海の活動をしていて、夏休みも午前中補習して、午後は海に泳ぎに行くなんていうことはやってきた。

少し組織的にやろうと考えたのはこの20年ほどで、募集危機とかもあり、学校として生き残るために何か特徴を生かそうということがあり、やはり**海に近い環境を活かして学校の特徴を出そうということ**で、**海が好きな若い先生たちが積極的に声を出して、みんなで協力して進んできた。**

このときに、今までずっと3年生も林間学校は、箱根、足柄方面だったが、それを江の島や、学校から近いところにしようということで、当初は江ノ電長谷駅近くのユースホテルも兼ねる「花月園」を宿舎として、和賀江島あたりの潮だまりを中心に活動した。数年間、活動は定番化しつつあった。宿泊

学習以外にも、土曜日に出かけて行って海の活動をするなど、近い宿泊地のメリットを活かすことができていた。

しかし、「花月園」が廃業してしまい、一旦宿舎を三浦方面に移したが、やはり子どもたちの生活のエリアと三浦がちょっと離れているということもあり、前述のような日常的な継続ができなくなっていた。そこで、普段の生活と近い場所はないかということで、現在は江の島の「恵比寿屋」という旅館で、ここもちょっと子どもに最適な宿泊場所というわけではないが、泊めさせていただいている。

海という自然が相手なので、その1泊2日も海が荒れていて何もできないということがあるが、江の島だったら、ではまた次の土曜日に行こうということで延期して活動することができ、それから学校の帰りに寄ってみようということもできて、子どもたちにとっては**継続的にかかわることが可能になる**。海に親しむ活動のスタートとしてとてもいい形になっている。

5. 湘南学園小学校を取り巻く環境

どうしてそういうことができるのかということだが、学校を取り巻く環境というのは、年々厳しくなっていて、やはり**危機管理**であったり、**いじめ問題**であったりいろいろとあり、**学校はすごく今、萎縮しやすい状態**にある。公立だとすぐ何かというとアンケートという名の調査が入って、いろいろチェックされるわけだが、幸い私立なので、やはり、カリキュラムを含めて、自分たちで独自にやっという意識があり、湘南学園小学校は今600人で、各学年100名程度だが、それぞれの活動については、3人の担任にプラス副担任で、4人で検討して、**大体誰かが「こんなことやってみないか」と持ち寄ってきて、「いいね」となると、管理職、学校に提案をしていく**。承認を受ければ、教員会議で全員の確認をして実施が確定し、保護者に説明して、協力要請をするという流れになる。

保護者もどんどん授業に参加してください「授業参観」ではなく「授業参加」ということを、これもやはり20年以上前から訴え続けているので、比較的オープンに、いつでも見に来ていいんだという意識はそのベースにある。**お父さんが魚屋さんだったらお父さんに授業をやってもらう**ということで、実際、魚をさばいてもらったりするのを見るとか、そういう授業をどんどんダイナミックに取り入れたりするという土壌もあった。

これはまとめていて気がついたが、やはり創立からの**保護者と教員がつくっているという学校全体の伝統**がずっとあったからと思う。

やってしまえば、と言ったら変だが、**きちんと周囲に説明しながら進めていけば、大きな批判があったりトラブルが起こったりしないので、子どもにとっていいと思うことは、勇気を持ってやってみることが大事かな**と思う。

6. 湘南学園のこれまでの活動

小池さんとの出会いは、スノーケリング体験の時からスタートした。藤沢の近くにあるダイビングシ

ヨップが NPO 展開している時に、スノーケリングスクールをやっていて、そのノウハウをお借りするという形からスタートした。

学年が江の島の沿岸でスノーケリング体験をしたということで、海が近いので、1時間目授業をやって、歩いて行って、3・4時間目でスノーケリングしてまた帰る、というようなことが可能で、その日の朝、海の状況でちょっと今日は無理だね、となったら普通の授業をやる。行けそうだったら行く、というような、非常に柔軟でダイナミックな展開ができた。

私も入っていたので、いい写真がなくて、かき集めた。一番右端のテトラポットの先、あの辺から潜って、身近に見ていた海にちょっと入ったら、**こんなに深いんだ、と大感激で、印象に残っている。**

最近の3年生の海の学校はアウトリガーカヌー体験をして、楽しんでいるが、これも、その日が荒れている場合には別の日にカヌーだけ実施するという展開も可能になっている。

「花月園」に泊まった時には、朝早く起きて出かけて行くと、漁師さんが（魚を）揚げているところを見ることができる。**その場面は、結構リアル**で、子どもたちがうるさいと「うるせえ」と怒鳴り散らかされることもあって、これもまさに本物で、子ども向けの体験、見学コースで味わうことはできない非常にいい体験だった。

岸壁や、護岸ができていないような自然の川を求めて、小田原の方まで行ってみるとか、本当に思いつきでダイナミックに実施してきた。

7. 湘南学園の今年の活動

今年の活動の紹介。今年3年生は活動に直接関わっていないので、担任に頼んでいろいろな情報を得た。

まず、小池さんに協力いただいて江の島の磯観察からスタートした。保護者の方にも来ていただいた。

4月に、これは3年生だけではないが、交歓会といって、1年生から6年生までが縦にチームに分かれて、1年生の歓迎行事をする。1年生から6年生まで混ざって砂の芸術を作ろうということで、鵜沼海岸まで足を運ぶ。これが海との最初の出会い。

2011年の4月だけは、やはりちょっと危険ではないかということで中止にしたが、それ以降はまた復活して、避難ルートとかも確認しながら続けている。

3年の海の学校では、江の島水族館と連携して、アクティビティをした。

実はこの学年を1・2年生で受け持って、2年生のときに教科書に出てくる「海のかくれんぼ」という教材をもとに江の水のほうでオリジナルのワークシートをつくってもらい、その教科書とマッチするような形で展開し見学した経験をもつなど、子どもたちはもう水族館に大変なじんでいる。

この日は磯観察もあったが、あまり海のコンディションがよくなかったので、さざえ島という半人工のフィールドで海の活動をした。ここもこれからオリンピックでヨット会場になるので、どこまでできるかここ数年は心配。子どもたちは現場に慣れていると、すぐ活動に入れるので、非常に濃い活動がで

きる。

8. 魚との話

秋には地元の網元さんと提携して、地引網を展開している。去年の秋は豊漁だった。

この社長さんがウミガメのことにも非常に造詣が深くて、こっちのほうの砂がちょうどいいやわらかさなんだよ、なんていう話もしてくれる。ちょっと珍しい魚についてはいちいち解説してくれて、それから、これは危険なんだよ、という魚も実際見せてくれて、子どもたちが魚に親しむことができています。

お土産に持って帰るということで、お魚を分ける時はお母様たちが協力してやってくれる。

また、獲れた魚を使って、魚の解剖ということで、生物の解剖についてはなかなかいろいろなことがあって実施は難しいが、**お料理と解剖のミックス**のように、何となく、魚の構造というよりも、僕たち生きている物をいただいているんだね、という感じで、こんなふうに開いたら本当に干物になるんだね、という、当たり前のことだが、なかなか実際にできない体験をすることができた。

海の低位の生き物がどんな風になっているか、ということは大きな意味で海を知る上で大事なので、海草の性質などを勉強した後に、アート作品をつくる、という活動もしている。

あと、この他にも、サンゴの植えつけの活動をしたりとか、海洋のビーチクリーンキャンペーンに参加したりとか、そういった活動に、年によっていろいろだが、参加して豊かに展開をしている。

やはりこういうことができてきたというのは土地柄、というか、鵠沼とか湘南地区の土地柄が何となくそういうことを可能にするような空気がある。それから**保護者がすごく好奇心があって**、もちろんサーファーの方とか、おじいちゃんが漁師だったとかという人もいるが、そのような知識がなくても学校側の意図に対してすごくいい反応をしてくれて、積極的に協力的にどんどんどんどん名乗り上げてくださるということも僕たちにとって追い風になってこういう活動ができていると実感できる。

これが残っていくので、**1・2年生の子たちは「3年になったらこれができるんだよね」という風に憧れてつながっていく。**

こういったことは、毎年定番になっているものもあるが、**その年その年のアイデアでどんどん変えていい。**でないと、今度またルールの上を必ず行かないといけないというように硬直化してしまう危険性がある。それもまたよろしくないということで、適度に定番がありつつ、オリジナリティを生かすということで、**教員が楽しんでできるということ、子どもも楽しいということが大事だ**と思う。

湘南学園は「授業」が大事だということでやっている。「授業」というのは机の前のものだけではなく、入学式も「授業」、卒業式も「授業」、それからこうやって**外に出るのも「授業」ということで、しっかり学ぶ場なのだ**ということで多様に展開するということが理解されているから、皆がそれに向かって力が結集できるのかなと思っている。

■事例紹介 三例目

プレゼンター：塩田昌弘 さん 国土交通省港湾局産業港湾課クルーズ振興室長

表題：クルーズの振興と海の活用

はじめに

私のほうからはクルーズの振興と海の活用ということで報告します。

前半は私どもがやっている取り組み、後半は訪日外国人の実際の行動について具体的事例をつけている。

1. クルーズの概要

まず、クルーズの概要ということで、左側のグラフが世界のクルーズ人口の推移であるが、順調に伸びている。その中で、真ん中の緑色っぽいのがアジアで、中国の経済成長に伴って、アジアの伸びが非常に大きくなっている状況。これに伴って日本のクルーズも非常に伸びてきている。

右側が世界のクルーズ市場のイメージ。私もこの仕事に来て初めて知ったが、日本にいと豪華客船という言葉をよく聞くので、クルーズはものすごくぜいたくと言うか、すごく高いというイメージがあったが、見るとわかるとおり、1泊400ドルというラグジュアリー船、かなりの値段だが、実はそれは全体で見ると4%ぐらいにしか過ぎない。例えば、クリーンエリザベスや、日本の飛鳥Ⅱがラグジュアリー船。

それ以外ではプレミアムクラス、こちらは1泊200ドルぐらいの船で、外国船社が横浜や神戸を発着するようなツアーを組んでいたりする。

全体の8割を占めているのは、もっとお手軽で、1泊が70ドルぐらい。中国から非常に大きな、4,000人ぐらい乗れるような船が結構あり、それは大体カジュアル船。中国から家族連れで来たりしている。

クルーズの場合、3食食事がついて泊まれて、朝起きたら次の場所に移動している。重たい荷物を運ばずに移動でき、船内ではいろいろなショーなどをやっていて、それで1泊70ドルは非常にお得、という話を聞き、いろいろな人にこうやって宣伝している。実は私はまだ乗っていないが、今度のゴールデンウィークに狙っているので、ぜひ、皆様もクルーズに乗っていただければありがたい。

2. クルーズ船の寄港に関する状況

左側は外国から日本に来ているクルーズのお客さんで、見ていただくとわかるとおり、2013年、わずか5年前は17万人というのが**5年間で250万人と、ものすごい勢いで伸びている**。昨年はちょっと減ってしまったが、**2020年に500万人という目標を掲げている**ところ。右側が寄港回数。日本の船社が運航するのと外国の船社によるのとは分かれているが、昨年は外国船社が運航するクルーズは減って、2,013回だったのが100回減っているという状況。

日本が運航するクルーズ船というのはグッと増えている。後で話すが、少し小さい船が寄港回数を増やしたことが要因。

3. 外国クルーズ船社と国内クルーズ船社

外国のクルーズ船社については、いわゆる合併統合が進んでいて、大きく4つのグループがある。

カーニバル・グループというのが世界の半分ぐらいを占めている。日本でも、コスタ・クルーズとプリンセス・クルーズが横浜などをベースに日本発着クルーズを、ほぼ1年間通じてやっている。コスタネオロマンチカやダイヤモンド・プリンセスという船で行っている。

キュナード・ラインがクイーンエリザベスを持っている会社で、年間通じてではないが、日本発着クルーズを行っている。

こちらが国内の、日本の船会社で、飛鳥Ⅱとにっぽん丸、それから、ぱしふいっくびいなす、この3隻で行っている。

瀬戸内海を対象に、非常に小さな船で、お客さんが38人乗り、1泊数十万円ぐらいする非常に豪華な船、“ガンツウ”という船が一昨年の10月から運航を始め、昨年1年間運航したことでぐっと回数が増えた状況になっている。

ちなみに、飛鳥Ⅱは去年回数が減っているが、世界1周クルーズを行ってことによる。港1カ所寄るごとに1回というカウントをしているため、世界1周をやると3カ月ぐらい日本を離れるので、このような結果となっている。

4. クルーズ船が寄港する港について

クルーズ船がどの港に寄っているかということで、**外国から来る船はほとんど中国から来ていて、沖縄や九州に集中している。上位10港を見ると、上が博多、那覇、長崎、4位が横浜で、5位が宮古島、佐世保、石垣など、ほとんど西日本**になっている。

ただ、見ていただくと、回数は少ないが、**日本全国どこにでも港があれば寄れる**ということで、大都市以外のところもいろいろ寄っていて、私も初めて聞いたような港もあったりして、**地方創生という意味では非常に効果がある**と思っている。

5. 訪日クルーズ旅客の出発国・地域別シェア

日本に来るクルーズのお客さんがどこから来ているかということで、ほとんどが中国からとなっている。一番多いのが上海からで、中国以外を含めても半分以上が上海から来ている。次が天津からで、**ほとんどが中国からのお客さん**となっている。欧米から日本に船で来られる方はほとんどいないので、このような結果になっている。ただ、**欧米から飛行機で来て、例えば羽田、成田について横浜を発着する日本発着クルーズ船に乗ると、そういう方も結構いる。**

6. クルーズ船の寄港による経済効果

これは経済効果ということで、国土交通省が全国的に調査したわけではなく、各地で調査した結果で、**お客さん1人当たり1万円から14万円ぐらいの経済効果がある**という結果が出ている。

7. わが国のクルーズ振興に向けた取組

「明日の日本を支える観光ビジョン」ということで、よく言われる2020年に訪日外国人旅客数4,000万人はこれが元になっている。この数字はクルーズだけではなく飛行機等を含むので、全体が4,000万人の中で、訪日クルーズは500万人という目標を掲げている。

8. 「訪日クルーズ旅客500万人」の実現に向けた取組

先ほどのグラフのように、ものすごい勢いで（寄港数が）増えているので、受け入れの準備が十分整っていないところもある、一方で、**新しい岸壁を一から作っていると間に合わない**ので、今ある貨物を扱っている岸壁をクルーズでも使えるようにするという対応をしている。

また、入国するときに入国管理や税関ができるように比較的簡易な建物でテントを作ったり、テントがないところは船の中で検査をしているのが実態になっている。

その他、自治体の方と会議を作って、**商談会**ということで、我々の地元はこんないいところがありますよ、というようなことを船会社にPRすることもやっている。

9. 「官民連携による国際クルーズ拠点港湾」の取り組み

これは船会社と連携して取り組んでいることで、船会社が日本の港にどんどん寄りたいという話の中で、同じ日にいろいろな船会社が入りたいという場合があり、希望する日に船がその港に寄れないということがあがる。それをできるようにするために、**船会社にターミナルビルを作ってもらって、その代わりにその船会社に岸壁を優先的に使える権利を与えましょう**ということで、法律を改正して制度を作っている。

その結果、現在はその制度を使って取り組みを進めている港がこちら。東から横浜、静岡県清水、九州は長崎県の佐世保、熊本県の八代、鹿児島、沖縄県の本部、宮古島にある平良という港で取り組みを進めている。

昨年の10月から12月まで3回目の募集をやって、今、下関と那覇から申請が上がってきている状況。

10. クルーズ旅客等の満足度向上・消費拡大に向けて～上質な寄港地観光の造成に向けた取組～

お客さんの満足度向上ということで、**せっかくお客さんが来たのに免税店ばかりに行っているとか、あとは無料の観光地を訪問して地元にお金が落ちない**という話がある。

そのようなツアーばかりだとお客さんの満足度もあまり高くないということもあり、船会社も問題意識を持っているところもあり、昨年の4月から船会社の幹部の人に参加してもらい、地元の方々との意見交換会をやっている。プリンセス・クルーズ社やロイヤル・カリビアン、コスタ・クルーズの副社長クラスの人に来てもらい意見交換をして、来月ぐらいにプリンセス・クルーズはこのときの話を受けて新しいツアーを発表する予定となっている。

11. クルーズ船の寄港による文化交流

いろいろな地域でクルーズの受け入れの独自の取り組みをやっていて、北海道の函館では地元の女子高の英語科の生徒さんが通訳のボランティアをやって、観光案内や日本の文化の体験をしてもらうような取り組みをやっていて。

12. クルーズ旅客の市街地へのアクセス向上

秋田では JR の協力もあり、船が泊まる場所からちょっと歩くとところに鉄道の駅を作り、バスだと 40 分かかるところを市内まで鉄道で 15 分で輸送できるようにしたという取り組みもある。

13. 各寄港地での取り組み

これは高知の例、高知城が有名な観光地ですが、港から高知城に直接バスで行くのではなく、わざとその手前の商店街のところでお客を降ろして、商店街でボランティアが、地元では「オセツカイスト」と呼んでいるそうなのですけれども、商店街を案内して、いろいろ買ってもらおうという取り組みをしている。

熊本県の八代港では、地元で会社を立ち上げて、地元の名産品を船に納入するといったビジネスが始まっている。

宮崎県の日南市の油津港では、函館と似ているが、文化交流ということで、これも地元の高校生が観光案内をしている。

こちらも地元食材の提供で、沖縄県がゲンティン香港グループというところに地元の名産を納入することを行っている。

このように、いろいろな場所で様々な取り組みを行っている。

14. 訪日クルーズ旅客の行動について

実際にクルーズ旅客者がどういう行動をしたかということで、横浜と下関の事例を紹介する。

これは横浜に昨年 10 月にコーラル・プリンセスという船が来たときにとったアンケートによるヒアリング結果。場所は桜木町のエリアで、お客さんと、乗組員の人にも意見を聞いた。全体で 250 人ぐらいに、どこに行ったか、というようなことを聞いた。

細かい話はまたグループディスカッションの時にでもと思うが、三溪園や、桜木町のところに着いていたので大栈橋もあるが、**横浜市の方はこれでいつも悩んでいるが、横浜港に来たのに東京に行ってしまう人もそれなりにいる。**

下関市でも調査をしていて、平成 29 年の調査では、お客さんの中に団体のツアーに参加する人と、あとは個人でツアーに参加しない人に分かれるが、95%の人は団体ツアーに参加している。

下関について、市内に行った人はこれくらいで、関門海峡を渡って九州の方、北九州や福岡に行っている人もかなり多い。福岡の免税店に行っている人もかなり多くなっている。

また、大宰府天満宮は無料の観光地で、ここも人気がある。

海に行ったというような人は横浜でも下関でもまだまだ少ない状況なので、これからいろいろ考えていきたいなと思っている。

15. 訪日外国人の消費動向調査

これはクルーズ客だけではなく訪日外国人全体ということで、平成 29 年の消費動向調査の結果である。日本に来る前に期待していたこと(青)、今回実際にできたこと(赤)、次に来た時にやってみたいこと(緑)、という調査。これを見ると、緑が多いのは、スキー・スノーボード、舞台鑑賞やスポーツ、あとは自然体験ツアーや四季の体感。よく言われるが、買い物はだんだん減ってきて、**体験物が人気が出てきている**という傾向が出ていると思う。

やっていないから今後やりたいということかもしれないが、**特に欧米の方には、買い物ではなくていろいろな体験が人気がある**と聞いている。

16. 観光庁予算

観光庁の予算ということで、ストレスフリーということで入国手続きをスムーズにする整備や、まちの情報の入手の容易化、観光産業の基盤産業化などがある。

それから、**地域、文化、自然を活用した観光資源の整備**ということで、**広域周遊観光**という言い方で、地元の DMO などの事業計画に位置づけられた外国旅行者(対象)の誘客を目的として、地域ごとの連絡会議の調整を行ったものに限って、補助が認められている。

また、テーマ別観光による地方誘客ということで、これまでの選定テーマでは、**エコツーリズムや酒蔵ツーリズム、アニメ、サイクル、ご当地マラソン、忍者**などがある。

これから各地域の組織化、もしくはネットワーク組織を対象として全国に点在するテーマごとのネットワークということで、1カ所ではないとなっているが、こういったものについて情報発信の強化を支援する。こういうところで海の関係のもできるのではと考えた。

最後になるが、ぜひクルーズ船に乗って、クルーズ振興にご協力いただければと思う。

■事例紹介 四例目

プレゼンター：石井雅章 さん 神田外語大学准教授

表題：海の豊かさからSDGs全体を捉えよう

はじめに

まず、簡単な自己紹介をさせていただくと、神田外語大学の教員です。神田にあるのは本部と専門学校で、大学は幕張にあります。先ほどの湘南学園木村先生の話にもございましたが、実は歩いて20分ぐらいで海岸に出られるが、幕張はあまり海をうまく活用できていない街で、レッドブルのエアレースとか大きなイベントはあるのですが、あとはもう本当に風が強くて、ちょっと海岸に向かって歩くとめげてしまうという感じで、海が近いわりにあまり身近に感じられていない街だと思います。

外語大なので、名刺を渡すと、「ああ、英語ができるんですね」と言われてしまいますが、私は環境問題の社会学が専門でして、日本企業の環境対策が本来の研究テーマです。

あと、先ほど名刺をお渡しした方にはお話ししましたが、名刺にIR推進室というのが所属に書いてあります。これが誤解を生む元で、カジノ開発を誘致するという意味のIRではありませんし、企業の広報活動を意味するIRとも異なります。大学業界ではインスティテューショナル・リサーチという意味でIRという用語が使われます。大学が保有しているデータを分析して、そのデータに基づいて教育や組織改善をしていくというもので、そういう業務も行っています。

ですので、神田外語大学ではどちらかというとICTとかコンピューター、データ活用のような仕事をやっていますが、本来は環境問題の研究がメインです。

最近、いろいろな大学の教員、NGOや自治体のメンバーと一緒に持続可能性についての研究会を3年ぐらいやっています。どちらかというと理論ではなくて、現場で一緒にワークショップを作ったり、自治体の総合計画にSDGsを接合したりする実践的な研究を行っています。

以前は埼玉の城西大学というところに勤めていまして、そのときは環境社会学の教員として学部にも所属していました。耕作放棄地が大学の周辺にたくさんあったので、2008年から地域の農家の方と一緒に活動して、学生たちが農業をしながらこの耕作放棄地を活用する仕組みを地域に残していくという活動を私のゼミで授業の一環でやっていました。そういう意味では、海というよりは陸の人間なのですが、皆さんの活動とちょっと近いようなことを実践としてはやっていました。

このスライドは、先ほどご紹介した研究会の取り組みでして、「みがくSD研（未来の学びと持続可能な開発・発展研究会）」という研究会です。かなり多様な実践研究の報告がございます。

1. 持続可能な開発目標 SDGs

いよいよ本題です。持続可能な開発目標 SDGs ということですが、皆さんに少し思い出していただき

たいことがあります。

皆さん、2008年頃は何をしていたか、ちょっと思い出してみてください。2008年。(考え中)という感じで、ふだんは実はこれ、隣の方と2008年の自己紹介とかをやらせてもらう。今日はグループディスカッションがまた後にあるので省略しますが、実は2008年はいまから11年前。今年が2019年なので、2030年は11年後。2030年はすごく先のように思えるかもしれないが、たった11年前、2008年から今までの時間と同じものを前に倒すと2030年なのです。この感覚を持ってちょっと話を聞いていただければと思う。

持続可能な開発目標のアイコン、これはよくできています。ただ、よくできているからイメージ先行になりやすいということもあるのですが、でもとてもよくできている。これを目にしない日はだんだんなくなってきている。

そもそもSDGsとはどのようなものでしょうか。本イベントの最初のご挨拶にもあったように、**2016年から2030年までの国際社会が目指すべき目標群**のことです。**目指すべきゴールとターゲット**と呼ばれるもので、**17個**のカラフルなアイコンで示されています。この17のアイコンが**ゴール**で、大きな“分野”に近いようなもので、**その後ろに実は169のターゲット**、日本語にすると両方とも目標となってしまうのですけれども、**ゴールとターゲットが示されています**。

2030年にこういう状態に世界はなっていなければいけない、それを目指して世界を作っていきますよというものです。たった11年後、2008年から2019年までの11年と同じ11年の間に、そこまで目指していこうというものになります。

2. 持続可能な開発のための2030アジェンダについて

私たちはついついゴールのところばかり見てしまうのですが、SDGsは**2030アジェンダという行動指針**のなかで示されていることが重要です。**どうしてこういうことを目指していかないといけないのか**ということ、データに基づいて論じられていて、世界中のいろいろなステークホルダーによるディスカッションを踏まえて、**こういう世界にならなければいけないという理由**がちゃんと示されています。そして、そのアジェンダの中に**ゴールが示されている**。

ですので、**SDGsのおおもとは2030アジェンダだ**ということを理解いただきたい。日本語の仮訳が外務省から出ていますが、英語のほうが読みやすいかもしれません。結構、論理的でわかりやすいです。

このアジェンダのタイトルは、“Transforming our world”です。日本語にすると、私たちの世界を変革する。2030年に向けての行動指針とタイトルに示されています。

このタイトルは、これまで我々が基盤としてきた世界のあり方では持続可能ではないよね、ということの意味しています。**このままではとてもではないけれども持続可能性を維持することはできない**ということで、こういうタイトルがついていることが重要です。

ご存じの方も多いとは思いますが、SDGsには2つの源流があります。もともと持続可能性、サステイナブル・デベロップメントという概念が出てきたのは1980年代です。1992年にはいわゆる「地球サミット」があり、その後、地球の温暖化防止と生物多様性といった環境面での課題と、もう1つはミレニアム開発目標（MDGs）として示された貧困とか格差などの開発面での課題というふたつのものが同時平行的に進行していました。それが今回、再び合流してSDGsとしてまとめられたと考えていただくと、わかりやすいと思います。

私もどちらかというと環境側のルートから関わってきた人間なので、SDGsは環境のことを扱っているという意識が強いのですが、実はもう1つの重要な課題が貧困や開発で、世界中の**貧困の問題や格差の問題、もちろんジェンダーの問題**、そういったものが合わさって17の目標ができていると、ご理解いただけるかと思います。

3. サステイナブル・デベロップメントとは

サステイナブル・デベロップメントというのはまた難しい概念といえます。日本語にすると、どうしても「持続可能な開発」という言葉を使わざるを得ない。開発というのは、元々は仏教用語の開発（カイホツ）に由来していて、更新して新しいものにしていくという意味があります。しかし、開発と言われてしまうと、我々はどうしても経済開発とか土木工事のイメージを持ってしまうのが、ちょっとつらいところです。そこで二つの単語の組み合わせではなく、“SD”「サステイナブル・デベロップメント」という1つの単語、概念だと思っていただくといいかもしれません。持続可能な世界と言うからには、反対に**持続可能でない世界もある**わけです。消費の仕方だったり、生き方だったり、教育だってそうですが、世界のあり方によっては持続可能でない形態になりうるわけです。**紛争が起きてしまったら持続可能ではないので、様々な課題による紛争を回避し、持続可能な世界にしていく、そのためのゴール**としてSDGsを捉えることができます。

私が説明するときには、**全ての人々が人間らしく生き続けることができる持続可能な世界を達成するための目標、それがSDGs**ですという説明の仕方をしています。

人間らしく、というのが大事。ただ生きているだけではだめで、**人間の尊厳を持って全ての人々が生きていける、そのベースとなる生態系もきちんと守られている**かどうか、ということが重要な視点になります。

4. 誰一人取り残さない

SDGsのキーワードとして、No One left behindがあります。誰一人取り残さない、という意味ですが、逆に言うと、誰かを残してしまうような**分断を起こしてしまうと持続可能な世界にならない**という意味になります。

先ほど紹介した二つの源流の一つであるMDGsについて述べると、実はMDGsは一定の成果を出して

いて、貧困の度合いが減ったとか、最貧困層の人数が減ったという成果がきちんと出ているのですが、地域によって格差が生じていたり、依然として状況が改善していない人たちが実際にまだ存在している。そのような反省を踏まえて、**誰一人取り残さない**ということが**文言としてしっかり入っている**というところがポイントになります。

5. 169 のターゲット、232 のインディケータについて

実は **169 のターゲットの先に 232 のインディケータ**、**評価のための指標がついていて**、国連のサイトを見るとわかります。(https://unstats.un.org/sdgs/indicators/indicators-list/)

ちゃんと具体的に、何をどういう状態にしていくのか、ということが書かれています。**17 のゴール**だけ見ていると何となくただの**理念的なもの**かなと思われるかもしれないが、**169 のターゲット**があって、そこには**具体的な数字入り**で、こういう状態を目指すのだ、ということが書かれていて、かつ、それを**どう評価するのか**ということで **200 以上のインディケータがある**ということです。

また、進捗状況についてのレポートが毎年出ています。例えば、このスライドはゴール1の貧困に関してですが、この1年でどのような状態になったとか、基準年と比べてこうなった、ということがきちんと示されています。SDGs の概要を理解し、いま実際にどうなっているのか、あるいは自分たちはこれからどうしていくべきなのかを考える上で、**169 のターゲットと毎年のレポートと成果を確認する**のが役立つと思います。

6. 海の活動と SDGs その1～生態系サービスの視点から～

さて、いよいよ海とのつながりのお話になります。SDGs をどういう風に捉えたらいいのか、ということと、皆さんが普段取り組んでいらっしゃる海での活動との繋がりです。少し話をさせていただきます。

こちらはご存じの方とそうでない方が少し分かれるかもしれませんが、**生態系サービス**という考え方があります。元々は生態系の経済的な評価をするための概念です。本当にこのような考え方で生態系の価値を捉えていいのかというのはまた議論のしどころではあるが、ここでは SDGs とのつながりを考えるために少し触れてみたいと思います。

生態系サービスでは 4 種類のサービスが提示されています。つまり、生態系が人間に対して提供してくれるサービスにはいろいろなタイプのものがあるよね、という見方です。

1 つ目は**供給サービス**です。ある意味、資源として生態系が人間に役立つものです。

2 つ目は**調整サービス**です。生態系があることによって、温度変化などがモデレート（穏やかに）されることで、これがちょっとしたクッションの役割になって、災害が起こりづらくなったり、水が浄化されたりされるというのが調整的なサービスです。

3 つ目は、これも海の活動との関係が強いと思いますが、**文化的サービス**です。余暇活動などの楽しみ

だとか、心身のリラックスだとか、あるいは豊かな思考だとか、そういった文化的なものを提供してくれるサービスを生態系が持っているということです。

これらの3つは何となくイメージかと思いますが、それらの土台となっている部分があるということが重要で、これを**基盤的サービス**と言います。つまり、上記の3つのサービスの供給を支えるサービスです。生態系のおかげで、光合成が行われていたり、土壌がつくられたり、いろいろなタイプの循環があったりするわけですが、このような基盤的なサービスが先ほどの3つのサービスを供給する源泉になっているというわけです。

実は、**海の生態系サービス**というのも出されていて、これは環境省の海洋生物多様性保全戦略に明記されています。海の生態系サービスはというと、1つは**供給サービス**で、魚介類、これは食料として使ったり、それから薬品などの原料としてのサービスです。

それから**調整サービス**、これは気温・水温などが緩やかにしたり、水をきれいにしたりという調整的サービスを海は有しています。

それから**文化的サービス**。ここには関係する方も多いと思いますが、海を活用したレクリエーションだとか、海で過ごすことで精神的な恩恵を得ることができるというものです。

先ほどもお話しましたが、基盤的サービスというのは栄養塩の循環だとか、海の中を含めた光合成とか、これらをまさに生態系として成り立たせているのが**基盤的サービス**ということになります。皆様のご自身の活動をちょっと振り返る時に、**どういうサービスを、海のどういう恩恵を受けて、自分たちの活動が成り立っているのかとか、どのようなサービスを組み合わせて使っているのかとか**、あるいはこれからは**こういうサービスを意識して活用してみたい**とかを考えると、**生態系サービス**という視点が少し役に立つかもしれません。

7. 海の活動と SDGs その2～目標 14「海の豊かさを守ろう」～

これらを意識した上で SDGs のことを考えると、より結びつきを考えやすいかと思います。私もそうですが、自分たちが普段やっていることを振り返る際に、どうしても内側に視点が行ってしまいがちなので、SDGs との関わりを考える際には、なにかしらの枠組みを用いて、自身の活動を少し整理してから結び付きを考えてみるのがよいと思います。

今回、このテーマをいただいたて、まず考えるのは目標 14 に「海の豊かさを守ろう」と日本語で書かれている目標になるかと思います。海に関わる目標が入っているので、海に関わる活動をされている方は SDGs と自分の繋がりという時に、まず 14 番があるでしょうと目がいくはずですが。

たしかに、持続可能な世界のために**海洋**、それから**海洋の資源を保全し、持続可能な形で利用すると**、これが目指されている目標になります。

しかし、それで当てはまってよかった、とって考えることを終えてしまっているのか。これが今日の話の一番のポイントになります。実はこれを他の分野でもみんなたくさんやっていて、**自分がやって**

いる活動が 17 の中のどこに結びついているだろうか、これを気にすることはすごくいいことなのだけれども、これに当てはまるね、と言って終わってしまっているのか、について少し話したいと思います。

このスライドは文字が少し細かいのですが、先ほど述べた 169 のターゲットの中に 14.1、14.2 という形で、それぞれ海にかかわる個別のターゲットが書かれています。今は読み上げませんが、関心のある方はぜひご覧いただければと思います。

内容を見ると結構多様で、単純に海洋資源のことを言っているだけではなくて、沿岸の話だったりとか、海洋の酸性化の話だったりとか、そういったことが幅広くターゲットとして具体的に書かれています。

また、14.a、b、c という項目も記載されていて、14 のターゲットに関わるものとして関係する国際条約や取り決めなどがありますよ、というものが補足として書かれています。

8. 自分と持続可能な世界との関係を捉え直す

今日は考えるヒントしかお話しできませんが、このような海に関係するゴール（Goal14）があるとして、海の体験活動に関連する目標を当てはめるとするのがさっきの考え方です。ここからスタートするのは全然構わないが、できればこの先の段階まで進んでみたいね、ということをお話ししたいと思います。

先ほどアジェンダのタイトルが“Transforming our world”であるとの話をしましたが、そもそも SDGs は持続可能な世界を実現するためのゴールであって、これらの目標を 2030 年までの間にクリアしないと達成できないよね、というゴールであるわけです。

だから、私たちが向かう方向の先に、持続可能な世界というものがあるのだ、と思って 17 のゴールを見ないと、うっかりしてしまうと**自分の関係しているものと紐づけて終わってしまう**ということになります。

目指しているところはこの図でいうところの理想とする世界。これを目指して**自分と持続可能な世界との関係を捉え直す**ということが求められているわけです。

自分と持続可能な世界の関係について、そのパターンを 3 つプラス 1、合わせて 4 つ提示してみましょう。

1 つ目は貢献です。自身の活動があの世界を目指すためにどういう風に貢献できるのか。皆さんの活動と関係させて言えば、例えば、当然海のことにも貢献できるよね、ということもあるでしょうし、栄養に関することだとか、教育に関することだとか、あるいは持続可能な生産、消費と生産の 12 番のことに絡むとか。

目指すべき世界という最上位の目指すべき部分がないとただの紐づけになってしまうが、目指すべき世界を意識した上で、「我々の活動はこういう分野に貢献できそうだ」と**具体的に貢献できるもの**を考えてみる。

先ほどの湘南学園さんの話を聞いていても、学校で取り組まれていることが、おそらく海のことだけではなくて、学校の中での取り組みなので教育のことは当たり前ですが、それ以外にも実は地域の人との繋がりだったりとか、地域の経済的なことだったりとつながっているわけです。また、先ほどのクルーズの話もそうだと思います。さまざまな角度から**つながりを意識して考えてみると、こういう貢献の仕方ができるよね**、ということが見えてきます。これが1つ目の考え方のパターンです。

2つ目は、**持続可能な世界による「支え」**と書きましたが、自身の活動が一体この持続可能な世界を構成するどのような要素によって支えられているのか、という考え方です。

先ほどは我々がどう貢献するか、という視点でしたが、今度は自分たちのこの活動は当然**海の恩恵によって支えられている**こともあるし、**きれいな水によって支えられている**こともあるし、**海とつながっている陸地の持続可能性に支えられている**可能性もあるし、**気候変動への対策によって支えられている**かもしれない。

このように、**自分たちは一体何のベースの上で活動ができているのか**、という観点から SDGs と自分との関係を結びつけていくと、これが2つ目の考え方になります。

3つ目は、ちょっと辛い話になるかもしれませんが、**持続可能な世界からの「見直し」**ということ です。例えば、大学のことを考えてみると、貢献面では自分たちは当然教育に貢献しようと思っているし、支援面ではみんなが健康でいられるという3番のゴールに支えられて活動できているのかもしれない。

では、我々の教育活動は、SDGsとして掲げられたこの17の目標を、本当にきちんと満たすことができているのかどうか。このような観点から自身の活動を見直すということが求められているわけです。いくら大学が教育に貢献できていても、例えばジェンダーの問題に全く無頓着であったら、これは社会的な存在としての大学の意味をなしません。

エネルギーの使い方、働き方、平等など、このような観点なしに、いくらいい教育をしているとか、いくら優れた海の活動をしていると言っても、それだけでは足りないわけです。何せ目指すべき世界はすべての人が人間らしく生きていくことができる世界ですので、これを目指すために自分たちの活動がきちんとできているのか、という見直しをする。このような考え方が求められています。

これは正直言うと簡単なことではありません。トレードオフという言葉があるが、こちらをやらうとしたらあちらが立たない、のようなことは世の中にたくさんあります。ただ、現状では全く意識しせずに手をつけていないということも実はたくさんあるはずで、このような観点から自分たちの活動を振り返り、見直してみるとという考え方があるということです。

9. 持続可能な世界を実現する「学び」

最後につけ加えたのがこれです。**持続可能な世界を実現する「学び」**。「持続可能な開発のための教育(ESD)」という考え方が出てきたときに、よくわからない方も多かったようで、実は私自身も当初は単純に環境教育かなと思ってしまっていたところがありました。

でも、まさにいま、千葉自然学校の神保さんにも参加していただきながら、千葉で ESD の視点を取り入れた環境教育のモデルづくりのワークショップをやっているのですが、そうではないのだということが理解できました。ESD が目指していたのは単なる環境教育ではなく、**持続可能な世界を実現するための人を育てるための教育**だったのです。ただ水のことを学びましょうとか、気候変動のことを学びましょう、ではなくて、**持続可能な世界をつくるための人を育てるための教育**が ESD の目的なのです。そのように考えると、実はあらゆることが関係してくることが理解できます。

目指すべき**世界を実現するためにどんな学びが必要なのか**、あるいは**どんな学びを私たちが提供できているのか**、という観点から、皆さんの海の活動を見ていただくと、**実はすごく豊かな学びの機会を提供されているはずで、ただ海のことを学んでいることにはおそらならない**と思います。そういう視点で捉え直すこともできるのではないかとというのが最後にお伝えしたい考え方になります。

最後は少し大きな話になってしまったので、よろしければ後のディスカッションの時間にお話しできればと思います。ありがとうございました。

■グループディスカッション

テーマごとに 4 つのグループに別れて、50 分ほどディスカッションを行った。

■まとめ グループごとに 5 分ずつの発表、質疑応答

・グループ A「海の環境保全」

コーディネーター：神保副代表理事 講師：田中真一さん 発表者：竹内聖一さん

竹内：皆さん、こんにちは。南房総館山市から来た、たてやま・海辺の鑑定団の竹内と申します。ニックネームがウミガメと申します。

僕の個人的な話になってしまうかもしれないが、南房総のエリアとかで、ウミガメの話に限って言うと、本当に遭遇率が結構あって。それも、亡くなっているという状態が多い。それが結構な頻度である。

僕個人的にはそれをやはりどういう風に現実として、例えば僕たちとかは子どもに接することが多いので、そのときにどう伝えたらいいのかなというのが僕個人的な課題としてはある。

その中で話がさらに深まった感じで。意外とウミガメというのは知られていないことが多い、ということが、また田中さんとの話でわかって、本当に何年生きているのかもわからない。

亀はすごく鼻が利くとか、いろいろな話があった。アカウミガメの産卵地としては本土がすごく、日本は有数の産卵地であったりとか、そういう話の中で 10 年間で 60 センチぐらい成長するとか。なぜ死んでしまったのか、というのが海岸で打ち上がっているのわかるのか、ということで話をしたが、それはやはりなかなかわからないとのこと。

では、予想の話で、特に南房総エリアだと、漁師さんの網に引っかかるということが多いのではない

かという予想で、よくビニールとかを食べて死んでしまったかもしれない、みたいなこともあるが、そこが先行して走ってしまうのはちょっと違う可能性もあるという話があった。

そしてやはり、そこで保護という面で、例えば放流会みたいな、子亀の放流会、要は産卵に来ているやつを、卵を保護して放流するというのも、放流会のための放流会だとちょっと問題が起きる。というのは、要は本来の生態とは違う、人間の都合の放流会になってしまうと子亀の生存率は実は下がってしまうという話があった。

そういう中で、衝撃な話があって、小笠原では居酒屋でウミガメが売っていると。要は食文化という点では、これは小笠原はまだすごく亀が増えているので、食べても全然問題ない、ということではないのかもしれないが。事実として亀が増えているので、増えていることに対して食べていても、そういう現実として増えているという実績があがっていると。その中で、刺身がうまい。刺身と煮込みだそうです。それが僕としてはかなり衝撃的な話で。

そしてしかも、これは何かオフレコらしいのですが。四国も食べる。四国はアカウミガメがいいそうで。アオウミガメは癖がなさ過ぎる。という話が、これはなかなか衝撃で。

最終的に、課題となったのは、僕たち、そのうちの理事の神保さんもいるのですが。僕たち南房総エリアで活動していて最初に言ったように結構現実的に遭遇する。

そこでやはり子どもたちにどう伝えたらいいのか、というのがこれからの課題かなと思って、その辺やはり、ちょっとこれは教育の話になってしまうかもしれないが。現実的にマスコミなどでせつかくの亡くなってしまった亀に対してなぜこうなったのかということのストーリーとか、そういう背景とか、そういったことをこれからも語れるように、せつかく、今日田中さんともお知り合いになったので、僕たちの活動とかに活かしていけるような何か仕組みが作れると良いなと思った。

現状をとにかく知ってもらったり、子どもたちにそういうことを伝えることがすごく重要と感じた。

・グループ B「海辺の環境学習」

コーディネーター：小池副代表理事 講師：木村陽一郎さん 発表者：大沼知恵さん

大沼：わんぱく大学で大学生ボランティアをしている大沼と言います。

Bグループは海辺の環境学習という視点からグループディスカッションをした。

最初に、子どもの教育について焦点が当てられるが、まずその教える大人の意識が変えられないのかという切り口から始まって、**子どもが変わる姿で大人も変わる、子どもの成長を見て大人が変わっていく**、という意見が出て、その大人、親子での活動とかではやはり子どもが変わる姿を見るためには、親がまず、子どもに一番影響を与える存在であるから、やはり親自身、親だったり教師だったり、周りの大人が楽しむことが一番大事で。

やはり今の小学校の親は若い方が多かったりして、いろいろな経験をしていない方が多いので、親も

初体験で、**すごく親が楽しんでいる、そういうのを見て子ども自身も楽しくなって、そこでまた成長できている**というのがあるのではないかという意見が出た。

私自身は山形県出身で、内陸の方なので、海に行って泳いだことが去年までなかった。そこで、やはりそういう環境がなくても、関係がないところでどうやって教えたらいいのかということのをちょっと考えてみて、やはり大学に入るまで海に入ったことがない私自身の新しい経験、新鮮な経験が一番子どもたちにも伝わったりするのではないかというのと。

あとやはり、身近にある自然を知ることが一番大事で、スノーケリングをするためにわざわざ遠くに行く必要もなくて、周りにある一番近い海だったり川だったりするところで小さい生き物、小さい魚だったりプランクトンだったり、そういうものが身近に生きているんだよ、というところを自分が今生きている地元で知ることができれば、それで子どもたちは学習、学び、成長につながるのではないかなと考えた。

それを教える中で、やはり今はタブレットだったり、いろいろな技術が進歩しているので、そういう技術とかも使いながら、一緒に学習できれば、尚良いのではないかと考えた。

もう1個、違う切り口で、小学校の学習の中で、湘南学園小学校の学習の中でゴールはあるのかというところで、ゴールがあるものもある、ないものもあって、発表会をやったりもするが、ある1つのゴールを目指すわけではなく、それぞれ1人1人の元々の持っている知識とかも違ったり、心が揺さぶられるポイントとかも違ったりするので、やはりその1人1人の感じ方、そういうところが違うからこそ、その心の変化を大事にしていくことも教える中で大事なのかなとなった。

海辺の清掃活動をしている方の話から、ごみには地名の入ったごみなどもあって、それはどこから流れてきたのかな、という風に子どもたちに問いかけてみると地理の学習になったり、子供たちに何を考えて何に気づかせるか、ちょっとポイントを教えるだけで、子どもたちは自分で気づく、そういうことが学びにつながっているの、わざわざ答えを教える必要もないし、視点やヒントだけ大人が与えてあげれば、それは学習につながるのではないかなということがグループBでは話題になった。

・グループC「クルーズと海の活用」

コーディネーター：池上理事 講師：塩田昌弘さん 発表者：田畑絵里さん

田畑：こんにちは。スピリット・オブ・セイラーズというセーリングボートを利用した経験を提供している一般社団法人の田畑と申します。

Cグループはクルーズの振興と海の活用がテーマで、最初にそれぞれのインバウンドの経験から話が始まり、いかにインバウンドの体験活動を増やすかというところに話が飛んでいった。

クルーズ船のインバウンド傾向ですごく興味深い情報共有、話があり。塩田さんが話されていたクルーズ船で、中国から来るお客さんというのは西日本がメインで、西日本に来ると3泊4日などが組みや

すいと。日本に中国のお客さんが増えているということだが、欧米のお客さんは東日本の方が、という風に地域で分かれている。ダイヤモンド・プリンセスの4割は欧米のお客さんで、中国のお客さんはいない。中国のお客さんは、クルーズ船のラグジュアリー、プレミアム、カジュアルの中で、カジュアル船のクルーズが多いということだった。

では、ダイヤモンド・プリンセスに乗っているお客さんは体験活動に来てくれないのかな、という話をしたが、乗っているお客さんは大体ご高齢で、体験より見ていたいということで、ちょっとそれは残念だな、という話をした。

話の中でインバウンドのお客さんは増えて欲しいが、一体何を求めているのだろう、ということで、今、個人で調べて来る方も多いので、北大やインド人の方が初めて海に入ったという経験を北海道でしたということで、知らないことの体験というのがすごく大事なのではないのか。そもそも海に行く口実を作るのは、それは食事でもそうだし、きれいなものを見るのでも、ウミガメでもそうだが、そういう**口実を作る、必然性を作るフックとなるようなものが必要**なのではないか。プラス、やはり**食は大事**、食とくっつけたいね、という話もあった。

塩田さんが横浜でクルーズ船のアンケートをされた時に、アンケートを聞きに行くと結構皆さん喜んでたくさん話してくれたと。その時の経験から、**人との交流自体が資源**なのではないかなという話もあった。日本人はあまり英語を話せないし、話せるだけで貴重な体験みたいになる可能性もあるという話もあった。

来てほしい時に、SNSや情報発信などがあるが、来ている元の国のページで表示されれば来る人数が増えたりするが、そもそも来た方に、ではどこを見て来たのかというのを聞いて、どのページを見て情報を得ているのかというのを把握するというのも大事なのではないかという話もあった。

あと、ネタ不足ということで、観光協会と仲良くなって進めていくことが非常に有効なのではないかという話があった。

話はかなり分散したが、そういうことが、体験活動がインバウンドを増やすのにいいのではないかという話だった

・グループD「SDGs 目標 14 を考える」

コーディネーター：海上理事 講師：石井雅章さん 発表者：グループメンバー全員

海上：先生の講義と、今回のディスカッションを受けてどう感じたかを1人1人話してもらおう。

山本：スピリット・オブ・セイラーズの山本です。

私、SDGsという読み方すらも知らないで、ただよく耳にするので今回参加させていただいて非常に良かった。

まず、この14番というものがまずしっくり来なかった。なぜこの14番を私たちは標榜しなければい

けないのかという理由もよくわからなかった。先生の話聞いて、そして、皆さんとディスカッションをした中で、出てきたワードが、世界が世界をみんなで変えようと言っていると、それすらもすごく戸惑ったが、自分の今立っている場所、自分の今知っている世界をまず知って、それがどういう環境か、どういうシステムなのかというところを考え直して、それが14番でなくても、もし自分が今立っている場所が違う場所だったら、そこからまず世界に貢献していく。また、増やしていく。そして問題を今知る。自分が今抱えている問題を知るということを考える、良いきっかけになった。非常に参加してよかったなと思っている。

檀野：ダイビングのインストラクターをしております檀野です。

SDGsについては大分前から言葉は知っていて、結構わかった気になっていたが、私がわかった気になっていたのは17個のゴールまでで、そこから先はあまり意識していなかったな、というのが今回よくわかって、その先の169個のターゲットまで、ちょっと自分でも視野を広げていきたいなと、そう思った。

この後、ちょっとポスターも貼らせていただきましたが、海辺の環境教育フォーラムというのを3月に行う。やはりそこでもSDGsがテーマになっているので、そこでSDGsの本質みたいなものをしっかりと伝えられるようになっていけばいいなと感じた。

大塚：大塚です。仕事は都立で教員をしている。海として関わっているのは海辺つくり研究会の方でちょっとお世話になっている。

私は子どもの頃、東京育ちではないのでよくわからないが、みんな東京湾がきれいになったということで、私も横浜に行って見て、汚いという感じはしない。

ところが、これはちょっと誤解されると困るが、沼津のある海岸に行って、ああきれいだなあと周りを見て思っていたところ、最近この1年ぐらいで話題になっているプラスチックごみ、ペットボトルとかがやはり散乱しているなと思って、うわあと思った。

これは決して沼津とか静岡県内だけではなくて、言ってしまうとどこから流れてくるかわからない、国際的に考えなくてはならないということで、海に流れるプラスチックごみ、これが海の豊かさということで、今回14番を具体的にということだったが。

関連させて9番イノベーション、11番都市、12番生産・消費、こういうところから持続可能な開発目標ということで、当然、私が考えただけでは解決できる問題ではないので、2030年までにどんな解決が見られるか、ということで、いろいろと世界的にPDCAサイクルでアクションを起こしていかなければならない問題だと思った。

蓬郷：こんにちは。東京海洋大学の蓬郷と申します。

このSDGs14、海の豊かさについて、いろいろな資料を提供いただきありがとうございました。生態系サービスというような視点から考え直す良い機会になった。

私たちが取り組んでいる、文化的サービスという部分があるが、あまりそこがこのターゲットに引っかかっていなかったなので、どのように我々がそこに対して貢献していけるのかという風に考え直す機会

になった。

我々はそのに貢献できる方法があると思うので、そこを模索していく必要があると思うし、CNAC の活動そのものもこの SDGs14 に向かってどのように貢献できるかという視点も大事なのではないかと考えた。

崔瑛：静岡から参りましたチェヨンと申します。今日は参加して、SDGs について先生にいろいろ教えていただくチャンスをいただいて、個人的によかったと思う。

普段は観光、商品化とかマーケティングの研究をしているので、港の観光都市について昨年研究していたので、今回参加した。観光客が非常に増えて困っている観光地とか、オーバーツーリズムの問題とか、そういった観光地化することによる問題、そういったものと SDGs の関係性を一緒に考えて探してみたいなと考えた。

それから、SDGs のエバリュエーションシステム、評価する方法とか、それもちょっと教えていただいたので、また資料を調べて今後深く理解したいと思った。

川端：普段ダイビング機材メーカーで働いている。先ほどの海辺の環境教育フォーラム 2019 伊豆の事務局もやっている川端と申します。

私は両親がダイバーで、自分もダイビングを幼い時に始めたので、もう今年で 15 年目ぐらい、ずっと海で遊び続けている。やはりずっと楽しめる場所であってほしいなと思う。でもやはりどんどん環境が変わっているのも肌で感じていて。

その中で今回この SDGs の話を聞いて、改めての決意で、海以外のことをもっともつなげて考える力をつけたいと思った。

海上：今日、司会進行をやらせていただきました海上と申します。

皆さんに比べると僕が生きてきた世代はものすごく大災害がいっぱいあったし、昔遊んだゲームがどんどんどんどん変化していくとか、すごく変化を感じていた世代で。

SDGs は調べれば調べるほど本当に今、世界のシステムはめまぐるしく変わっているということがものすごくわかったので、ぜひ皆さんも調べると、あのこぎれいなイラストからは考えられないぐらい、世界の天才たちがこれでもか、というものをつくった結果なので、ぜひそのおもしろさを感じて欲しい。ぜひ行動に移してもらえればと思う。

・Q&A

三浦：Cグループのクルーズのことで、インバウンドの方に、集客になること、という部分で、食が大きいと仰っていたが、具体的にどういう食で、集客に繋げるというのは何か出たのか。あったらお聞きしたい。

大塚：北海道から来た大塚です。食の話をさせていただいた。

例えばクルーズ船に乗っていて、豪華な食事は多分食べているはずなので、一般的には冷凍食品だっ

たり、地元の物をとってすぐに食べるということは船の上の供給システムに合致しないので、おいしい物、ここに来たら、これを今とれている、食べてね、というので非常に訴求力があるので、それを提案すると。そうすると、とっているところを見に行きたくなり、行って食べたい、ということになるので、来ていただいて、そこにちょっとした体験が入って、といった仕組みを作ると良いのではないかと思う。

これは多分船の運行をしている会社さんにも魅力の1つとして伝えることができるのではないかと思っ
て食の話をした。

■閉会あいさつ

スピーカー：NPO 法人海に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 小池 潔

今日はたくさんの皆さんにお集まりいただき誠にありがとうございました。

今回のテーマは SDGs ということで、海の多様性を知るというテーマで4名の方に貴重なお話をいただきました。

海の多様性ということももちろん、海に携わる皆様の多様性をも感じた1日でした。

私たちは横のつながりをもって今後こういったテーマに向けて何かできることを続けていければと思います。

例えば、私は海辺の磯観察などをやっていますが、その磯観察に皆さんをお連れすること自体が環境にとっての負荷になる可能性もあります。その場所の（環境的強度などの）ことを考えて使わせていただき、（同じ場所を共有する）各団体の横の連携ももしかしたら必要になるかもしれない。

今後こういったことを達成するためにはやはり1個人、1団体だけではなく、さまざまな横のつながりというのが不可欠であるのではないかなと思う。今後のCNACという団体の活動意義もそこで深まるのではないかと感じ、決意を新たにした1日でした。

本日は誠にありがとうございました。

（了）